

トをしてしている自分に「いったい何をしているのだらう」という気持ちになる。主人公に再び悲しみが訪れる。

だが、少年は「今までずっと、僕は楽しかったよ」「今までずっと、だよ」と言う。今日初めて会ったばかりなのに……。

そして、少年は主人公にキスをする。そのキスが、死んだばかりのデュークそっくりだったことに、主人公はぼうぜんとする。

「僕もとても、愛していたよ」「それだけ言いにくかったんだ。じゃあね。元気で」。そう言うのと、少年は駆けていってしまふ。

少年はデュークだった。主人公に「ありがとう」と、お別れを言いに来たのだった。

死んだ犬が人間になって現れる、あり得ない話だ。だが、わたしには現実の話のよう

思えた。いや、現実のことと思いたかったのかもしれない。

『デューク』を読み終えたあと、コロが死んだときの悲しさ、もう二度と抱きついてくれ

ない寂しさがこみあげてきた。
コロはわたしが生まれる前から家にいた。
わたしが小さかったとき、コロはまるで自分
の方が偉いんだという態度だった。わたしは
ほえられて何度も泣かされた。
だがわたしはコロが好きだった。何度泣
かされても、だ。わたしにとって、大切
な家族だったからだ。
コロがわたしにほえることがなくなったの
は小学一年生になっただけのことだろうか。
わたしの体が大きくなっただけのことがあるのかも
しれない。コロが年を取って、元気がなくな
ったからなのかもしれない。
ほえられて怖いけれども、好きだったコロ
と、ようやく対等な立場になった、というこ
とだったのかもしれない。
しかし、わたしとコロの時間はやがて終わ
ることになる。わたしが小学校四年生のとき
コロは急に元気がなくなっていた。あれだ
け好きだったペットフードのささみも食べな

くなっていた。
 コロはもう十四歳になっていた。人間でい
 うと八十歳を超える年齢だ。十分に長生きし
 た。いつまでも元気なはずはない。
 十四歳、コロの死を受け入れなければなら
 ない年齢だが、わたしはコロが死ぬなんて思
 ったこともなかった。ずっと一緒に、家族と
 して暮らせると思っていた。
 だが、その日は訪れた。
 北風の強い日だった。学校から帰ると、コ
 ロは動かなくなっていた。フカフカの、真っ
 白な毛布に包まれていた。ストーブの近くの
 ごろんとしていた彼の指定席に、いつものよ
 うに横たわっていた。
 コロのそばに行つて「これなら寒くない
 ねー、わたしには精いっぱい言葉だった。
 自分の部屋に入ると、泣いた。いつまでも
 涙が止まることはなかった。悲しかった。一
 生涙が止まらないのかも、でも、悲
 しいのだからしかたがない、そういう気持ち

で、ずっと泣き続けた。わたしは涙が出なくなるまで泣いた。

その日からしばらくの間、わたしの記憶はない。いつまで悲しんでいたのか、いつ、コロナの死を受け入れることができたのか、コロナが死んだあと何を考えていたのか……。そのときのごとは今でも思い出せない。

コロナの死という残酷な現実が、時間を共有した楽しい思い出にいつ変化したのかは分からない。だが、今のわたしは、コロナに対して感謝の思いでいっぱいだ。楽しい思い出をたくさん残してくれたからだ。それはわたしの家族もみんな同じ気持ちだろう。

わたしもいつかコロナに会える、現実にはあるはずもないことだが、『デューク』を読んだ余韻が、そう思わせてしまう。

コロナが死んだとき、泣いて悲しんでばかりで、「ありがとう」と言えなかった。だから、「ありがとう」と伝えたい。そして「いつまでも忘れないよ」と笑顔で話しかけたい。